昭和 10 年代における文芸時評（Ⅱ）
── 文芸雑誌『新潮』『文藝』『文学界』『若草』『作品』『文学者』

松　本　和　也

1

本稿は，主要総合雑誌 4 誌を対象とした前稿[1]につづき，文芸雑誌 6 誌を対象とした，昭和 10 年代の文芸時評に関する調査報告である。

調査／報告に際しての文芸時評の捉え方なども前稿に基づくが，簡潔に再掲しておく。文芸時評の定義に関して，まずは目次及び本文に「文芸時評」と明記されたものとする。その上で，主に前月号の雑誌に発表された創作やトピックを対象とした月評も，文芸時評に類するものとして，種別をしながら暫定的に拾っておく。その際には，執筆者や誌面上のレイアウトなど，前後する号との同一性なども考慮することとする。いずれにしても，同時代における作品受容やその評価軸を検討するための素材となること，そのために複数の作品やトピックに言及したもので，特定の作家・作品・テーマ論ではないこと，をゆるやかな選定条件として設定しておく。なお，以下の本稿では，こうした広義の文芸時評を文芸時評（類）と表記することとする。調査対象時期としては，近年における論者の興味関心 ── 昭和 10 年代における文学場の多角的な検討[2] ── に即して，調査期間を昭和 10 年代（雑誌の刊行表記で，昭和 10 年 1 月号～戦時下における廃刊まで）とした。

昭和 10 年代の文芸雑誌については，小田切進が次のように概評している。

> 昭和十年代の文学になんらかの役割をはたし，意義をもつ文芸雑誌ということになると，かなり多種多彩の数多くの雑誌の動向がある。大正末期から昭和初頭の活気にみちみちた状況にくらべると，いわゆる文芸復興期の一時期にかなりの数にのぼる雑誌が新たに興され，さらにファッシズムの文化圧殺から芸術を守ろうとするさまざまな動向があって，幾多の雑誌の創廃刊がはげしい消長のあとを示しているが，全体としては戦局の進展とともに，きびしい統制のもとでしだいに痩せほそり，やがてすさまじい荒廃を呈するにいたった[3]。

もちろん，A・K・A「匿名　文芸時評」（『日本評論』S11. 11）では，《文学雑誌の売れないといふことは，こんにちではもう一般に通り相場のやうに信じられてゐる》，《いま純粋に文学雑誌として営業的に出てゐるのは，『新潮』と『文藝』と『文学界』と『若草』をかぞへうる位のものであらう》と述べられているように，昭和 10 年代初頭においてさえ，文芸雑誌は必ずしも全面的に隆盛をみていたというわけではない。それでも，こと日中戦争開戦以降，メディアにおける文学領域の（物理的な）スペースの減少が着実に進行していったことは間違いない[4]。伊藤整は「文学雑誌の現状」（『新潮』S13. 11）において，《社会情勢が変化の激しい時期になつて来てゐるので，やや早目ではあつたがスタイル研究には一応の決着がつけられてゐて，文学界には専ら文学を外部社会に適応させる問題のみが溢れてゐ

る》（160 頁）と，文芸雑誌の現実的な方向性を示唆していた。翌年になると，青野季吉が「文化機関としての綜合雑誌」（『新潮』S14. 11）で，《この数ケ月の綜合雑誌をひと通りしらべて見て，綜合雑誌といふものも随分変つたものだとの強い印象をうけた》，《その変化は何もこの数ケ月に限つたことで無く，事変以来のことだと云ふかも知れない》（170 頁）と書き記している。つづけて青野は，《綜合雑誌には時代の線に沿ひながら，その最も生動する面を反映し，それを誘導しなければならぬといふ仕事がある》（171 頁）と，時局を関数とした雑誌の存在意義を模索しつつ，次のような危惧を表明してもいた。

> この方面〔文芸の部門〕について，今日の綜合雑誌が，ずつと以前に比して魅力と権威を欠いて来たことは争へない。これにはいろいろ原因があり，必らずしも綜合雑誌の不勉強の為めでもない。またそれらに関して綜合雑誌の独占的権威が薄れたことは，文芸全体にとつて喜ぶ可き現象とも云へるのである。しかし綜合雑誌の内部に於て，文芸の方面が次第に他の部門に押されて来てゐるといふ事実や，文芸全体に対する視力が乱れて来てゐると云ふ事実は，そのまま見逃されていい現象ではない。（173 頁）

新聞学芸欄の消長などとも併せて考えるべき，総合雑誌を直接の対象として示された上の危惧は，昭和 10 年代の文芸雑誌において，より深刻なものとして展開されていくだろう。

文学場内部からの言表として，まずは岩上順一「文芸雑誌の将来」（『文藝』S16. 11）を参照してみよう。《新聞や綜合雑誌に於ける執筆枚数の制限の結果，原稿料に依存する作家達の収入は，総額に於て約三十万円の減収見込である》という室生犀星の試算にふれた上で，岩上はまず《事実綜合雑誌をはじめとし，「文藝」「新潮」「文学界」「知性」なども，今月あたりから可成大幅な減頁を行はねばならない様》で，《しかもこの減頁は一時的なものではなく，継続的なものであり，深化的なものであることは今更言ふまでもない》と現状を確認する。その上で，《いかなる点から見ても，文学芸術の花咲くべき園が日日切り取られ狭められて行かざるを得ないことは明瞭》（144 頁）だという認識を示す岩上は，次のように文芸雑誌が担うべき新たな役割を提示している。

> 私は，今日の文芸雑誌（ばかりでなく一般にすべての営業的雑誌がさうなのであが[ママ]）が直面してゐる営利性と政治性との調和の困難に注目せずにはゐられない。今日あらゆる条件は，文芸雑誌の芸術的孤立性を許容し得なくしつゝあるのだ。それは民間からするところの文化運動の中心的な機関にまで成長することを強く要求してゐる。（144–145 頁）

これが，文芸雑誌の独自性や自律性よりも，その存続のために公的＝政治的な役割を担うことを主旨とした言表だとすると，その対極に位置すると思われるのが，中村光夫「文芸雑誌について」（『文藝』S17. 5）である。まず中村は，現状認識を次のように示す。

> ジヤーナリズムが頑健な繁盛振りを示し，その月々の必要が文学の需要をつくりだし，いはゞ文学のために雑誌があるのでなく，雑誌のために文学があつたと形容したいやうな時代には，文壇は批評家が何を云はうと世間がどう思はうと，いはゞその物質的な必要に押されてどんどん廻転して行く。しかしかうしたおそらく多くの作家の眼には一番「現実的」に見えた文壇の基礎も，最早危殆に瀕してゐるのではないか。

文芸雑誌を《一番「現実的」に見えた文壇の基礎》と捉える中村は，それが《皆一年前の同人雑誌の

やうな薄さ》になった現実を直視した上で，しかし《僕を悲しませるのはかうした雑誌の外観の貧弱さではない》（106 頁）という。そうではなく，《国民文化の重要な一部門をなす筈の文芸雑誌に果してその外観の貧弱化を充分に償ふに足る文学精神の高揚が伺はれるのであるか》と問う中村は，《残念ながら現在のところ誰しもさうだとは云へないのではなからうか》（107 頁）と述べて，《厳密に考へれば，文芸雑誌の存在意義は何時の時代にも時代の孕む潑剌たる文学の夢の実験室たる以外にはあり得ない》（109 頁）と断じていた（もとより，物質的な基盤の減少の中，いかにそれが可能かはまた別の議論である）。

ちなみに，昭和 18 年になると，『新潮』誌上で文芸雑誌や文芸時評に関する議論が少なからず展開されていた。そこでは，岩上／中村の対立自体を無化するような，身も蓋もない現実がレビューされていた。《このごろはジヤーナリズムの上で，文芸時評が見られなくなつてしまつたし，文芸雑誌や総合雑誌なども，ひところのことを思ふとページ数が三分の一以下に減つてしまつた》（3 頁）という無署名「文芸時観」（『新潮』S18. 4）では，《文学の動きや，思潮や傾向の推移などが表面から見ただけはハツキリ分からないといふこと》についての《種々の原因の中の一つ》として，《文芸時評の衰滅》があげられている。

> 曾つて文芸時評の盛んだつた時代には，正直に言つて文芸時評の氾濫を，すこしウルさい感じがしたものである。どの新聞にも，どの雑誌にも，毎月毎月文芸時評が掲げられる。そして，文芸時評と言へば決まり切つて，必ず作品批評の羅列である。めいめい勝手な立場から，勝手な批評をするのだ。（4 頁）

ただし，事後的に振り返れば《作品の鑑賞や批評は，各人の主観に基づいて行はれ，それが正直に表現されてゐれば，それでいい》（5 頁）ものであり，《曾つての文芸時評といふものは，さういふ役目をなし ── その意味に於て，批評といふものの正しい役割を果してゐたことが，今にして漸く分つた》，《それだけに，さういふ文芸時評がなくなつたことは，まつたく不便である。── どこに，どんな作品が現はれたかも，さつぱり分らない》（5 頁）と，この記事では文芸時評自体の減少にくわえ，それゆえの不便さが嘆じられている。それはもとより，文芸時評のみにとどまる問題ではない。《ひところの文芸雑誌の統合問題も，いろいろやかましかつた時代があつたが，それから今日まで，実際としては何んのこともなく過ぎて来てゐる》という現状認識を示す無署名「文芸時観」（『新潮』S18. 9）では，《ただ，一列にページ数が減少して，みんな薄ッぺらなものになつてしまつただけ》だと現状が報告され，《現在のページ数では，いかに工夫して見ても，どう割り振つて見ても，記者が立案する原稿の十分の一も収録することは出来ない》（4 頁）と嘆くばかりである。

こうした同時代からの文芸雑誌への言及を加味しながら，今回調査対象としたのは 6 誌である。具体的には，主要文芸雑誌として『新潮』，『文藝』，『文学界』の 3 誌，それから商業的に成立していたとされる『若草』，同人雑誌ながら商業誌に近しい位置をもっていた『作品』，『文学界』への対抗組織であった『文学者』をくわえて，6 誌を扱うこととした。

2

今回は，文芸雑誌として，『新潮』，『文藝』，『文学界』，『若草』，『作品』，『文学者』を調査対象とし，昭和 10 年代の刊行分における文芸時評の掲載状況を調査した。具体的には，各誌の刊行状況をふまえつつ，文芸時評（類）の有無を確認し，掲載されていた場合，当該記事の署名，タイトル・サブタイトル，掲載号（年・月），掲載ページ，当該号の総ページ，価格を確認した。

このようにしてまとめた，以下に掲出する［表 1］〜［表 6］の項目について，説明しておく。「種別」は，「文芸時評」と明示されていれば◎，明示はないものの，それに類すると判断できたものは○，月評形式をとった文学・文壇関連記事は▲と記した。「署名」は記事に付された書き手に関する情報で，匿名や無署名も含めて，原文記載通りとした。「題名」は，記事のタイトル・サブタイトルを，これも本文の表記に従って記した。目次と異なるケースも散見されたが，その場合は本文冒頭の記載を採った。「掲載月」は，当該記事が掲載された雑誌の奥付上の刊行年月を，昭和を「S」と略記して示した（例「S10-01」は昭和 10 年 1 月号の意）。「掲載頁」は，当該記事掲載範囲をページ数で示した（なお，一行でもかかっているページは掲載ページとしたため，重複箇所もある）。分量比は，当該雑誌の総ページ数を分母，当該記事の掲載ページ数を分子として，誌面全体に文芸時評（類）が占める割合を示した。なお，その際，当該記事が何段で文字組みされていたかも括弧内に数字で示した（例「(2)」は 2 段組みの意。変則的なものは，その都度注記した）。「価格」は当該号の価格を，単位を円として示した（例「1」は 1 円，「0.8」は 80 銭の意）。

2-1：『新潮』

1904（明治 37）年に創刊された『新潮』は，文芸時評（類）の掲載も含め，昭和 10 年代にもなお重要な文芸誌の 1 つで，中村武羅夫は「編輯者の覚悟と抱負 ── 「新潮」編輯の過去を顧みて」（『新潮』S18. 5）において同誌を次のように意味づけている。

> 「新潮」は常に不偏不党，文芸界の公器として，四十年一日の如く文学のために尽して来たと言つていい。時代の動くところに従ひ，時代の問題は遁さず捕へ，思潮の推移や「時の相」といふやうなものは，いつでも敏感に正確に反映して，正しい意味のジヤーナリズムの任務使命を果すことに心掛けて来た。（12 頁）

とはいえ，時局柄，《文学も文学雑誌も，当然に八紘為宇の精神に基づき，国内的規模の狭小さから脱して，少くも当面的には大東亜共栄圏の指導的任務の自覚に於いて，経営されなければならない》（14 頁）といった言表もみられ，《公器》も歴史性を帯びてはいた。

『新潮』の昭和 10 年代における文芸時評（類）の掲載状況については，下記の［表 1］にまとめた。

［表 1（『新潮』）］

種別	署名	題　　名	掲載月	掲載頁	分量比	価格
◎	川端康成	文芸時評	S10-01	272-280	9/320（2）	0.7
◎	川端康成	文芸時評 ── 新年諸雑誌の作品 ──	S10-02	96-102	7/215（2）	0.5
◎	川端康成	文芸時評 ── 作家の実際論 ──	S10-03	200-206	7/216（2）	0.5
◎	芹澤光治良	文芸時評　三月の小説印象記	S10-04	172-176	5/215（2）	0.5
◎	芹澤光治良	文芸時評	S10-05	188-194	7/216（2）	0.5
◎	尾崎士郎	文芸時評	S10-06	97-105	9/216（2）	0.5
◎	尾崎士郎	文芸時評	S10-07	158-167	10/216（2）	0.5
◎	尾崎士郎	文芸時評	S10-08	164-171	8/216（2）	0.5
◎	室生犀星	文芸時評	S10-09	142-148	7/215（2）	0.5
◎	岡田三郎	文芸時評	S10-10	77-85	9/215（2）	0.5

◎	岡田三郎	文芸時評	S10-11	138-147	10/216（2）	0.5
◎	岡田三郎	文芸時評	S10-12	134-143	10/216（2）	0.5
◎	河上徹太郎	文芸時評	S11-01	316-325	10/351（2）	0.8
◎	河上徹太郎	文芸時評	S11-02	166-175	10/247（2）	0.6
◎	河上徹太郎	文芸時評	S11-03	100-109	10/247（2）	0.6
◎	尾崎士郎	文芸時評	S11-04	64-71	8/247（2）	0.6
◎	尾崎士郎	文芸時評	S11-05	158-166	9/247（2）	0.6
◎	尾崎士郎	文芸時評	S11-06	177-184	8/248（2）	0.6
◎	阿部知二	文芸時評	S11-07	181-188	8/248（2）	0.6
◎	森山啓	文芸時評	S11-08	217-224	8/248（2）	0.6
◎	勝本清一郎	文芸時評	S11-09	208-213	6/248（2）	0.6
◎	本多顯彰	文芸時評	S11-10	139-147	9/248（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S11-10	114-117	4/248（3）	0.6
◎	本多顯彰	文芸時評	S11-11	162-169	8/248（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S11-11	100-103	4/248（3）	0.6
◎	本多顯彰	文芸時評	S11-12	135-141	7/248（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S11-12	106-109	4/248（3）	0.6
◎	新居格	文芸時評　文学現象の二問題	S12-01	312-319	8/367（2）	0.8
▲	名取勘助	小説月評	S12-01	308-311	4/367（3）	0.8
◎	丹羽文雄	文芸時評	S12-02	142-149	8/312（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S12-02	104-109	6/312（3）	0.7
◎	中野重治	文学における新官僚主義 ── 文芸時評 ──	S12-03	106-115	10/248（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S12-03	54-57	4/248（3）	0.6
◎	中野重治	一般的なものに対する呪ひ ── 文芸時評 ──	S12-04	76-88	13/248（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S12-04	68-71	4/248（3）	0.6
◎	中野重治	批評と常識 ── 文芸時評 ──	S12-05	114-135	14/248（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S12-05	72-75	4/248（3）	0.6
◎	高見順	批評と小説との背馳に就いて ── 文芸時評 ──	S12-06	226-233	8/312（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S12-06	204-207	4/312（3）	0.7
◎	森山啓	文芸時評	S12-07	126-134	9/247（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S12-07	56-59	4/247（3）	0.6
◎	亀井勝一郎	文学党派 ── 文芸時評 ──	S12-08	185-191	7/247（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S12-08	96-99	4/247（3）	0.6
◎	伊藤整	文芸批評の危機 ── 文芸時評 ──	S12-09	248-254	7/312（2）	0.7

▲	名取勘助	小説月評	S12-09	220-223	4/312（3）	0.7
◎	窪川鶴次郎	芸術至上主義の現代的悲劇 ── 文芸時評 ──	S12-10	160-167	8/247（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S12-10	130-133	4/247（3）	0.6
◎	徳永直	報告文学と記録文学 ── 文芸時評 ──	S12-11	52-59	8/247（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S12-11	90-93	4/247（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S12-12	60-63	4/247（2）	0.6
▲	名取勘助	小説月評	S13-01	294-297	4/369（3）	0.8
◎	板垣直子	文芸時評　文学思想の国際化	S13-02	232-241	10/311（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S13-02	256-260	5/311（3）	0.7
◎	本多顕彰	文芸時評　批評の基準	S13-03	80-87	8/304（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S13-03	156-159	4/304（3）	0.7
◎	伊藤整	文芸時評　新潮賞と芥川賞の作品	S13-04	150-157	8/301（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S13-04	60-63	4/301（3）	0.7
◎	村山知義	文芸時評 ── 新聞小説について ──	S13-05	170-177	8/303（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S13-05	192-195	4/303（3）	0.7
◎	岡田三郎	文芸時評	S13-06	88-95	8/352（2）	0.8
▲	名取勘助	小説月評	S13-06	133-136	4/352（3）	0.8
◎	春山行夫	綜合雑誌編輯者論（文芸時評）	S13-07	106-114	9/302（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S13-07	122-125	4/302（3）	0.7
◎	窪川鶴次郎	現代文学の恒常性（文芸時評）	S13-08	294-303	10/304（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S13-08	228-231	4/304（3）	0.7
◎	舟橋聖一	文芸時評	S13-09	136-142	7/304（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S13-09	104-106	4/304（3）	0.7
◎	中島健蔵	胡適にことよせて ── 文芸時評 ──	S13-10	208-215	8/303（2）	0.7
▲	名取勘助	小説月評	S13-10	106-109	4/303（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S13-11	172-178	7/303（2）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S13-12	228-231	4/303（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-01	306-309	4/372（3）	0.8
▲	神田鵜平	創作時評	S14-02	252-256	5/303（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-03	112-115	4/299（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-04	84-87	4/372（3）	0.8
▲	神田鵜平	創作時評	S14-05	198-201	4/302（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-06	54-57	4/303（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-07	150-153	4/303（3）	0.7

▲	神田鵜平	創作時評	S14-08	106-109	4/304（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-09	70-73	4/303（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-10	102-105	4/304（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-11	76-79	4/304（3）	0.7
▲	神田鵜平	創作時評	S14-12	116-119	4/280（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-01	304-307	4/368（3）	0.9
▲	徳田秋声・岡田三郎・青野季吉・中野重治・中村武羅夫	創作合評会（新年号の創作）	S15-02	228-244	17/271（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-03	106-109	4/247（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-04	136-139	4/240（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-05	96-99	4/240（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-06	76-79	4/239（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-07	138-141	4/240（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-08	122-125	4/240（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-09	88-91	4/240（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-10	92-95	4/224（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-11	108-111	4/224（3）	0.7
▲	嵯峨傳	創作月評	S15-12	94-97	4/216（3）	0.7
▲	アンケート	一月の小説（ハガキ回答）	S16-02	66-68	3/215（3）	0.7
▲	石田英二郎	二月の小説	S16-03	98-101	4/216（3）	0.7
▲	石田英二郎	三月の小説	S16-04	116-119	4/220（3）	0.7
▲	石田英二郎	四月の小説	S16-05	100-102	3/208（3）	0.7
▲	石田英二郎	五月の小説	S16-06	66-69	4/216（3）	0.7
▲	石田英二郎	六月の小説	S16-07	112-115	4/216（3）	0.7
▲	石田英二郎	七月の小説	S16-08	86-89	4/184（3）	0.6
▲	石田英二郎	八月の小説	S16-09	108-111	4/184（3）	0.6
▲	石田英二郎	九月の小説	S16-10	68-71	4/184（3）	0.6
◎	室生犀星	文芸時評　詩歌小説	S17-02	72-75	4/155（2）	0.6
◎	徳永直	文芸時評　伝記小説について	S17-02	76-78	3/155（2）	0.6
◎	中山義秀	文芸時評　一つの声	S17-02	79-81	3/155（2）	0.6
◎	宮内寒彌	文芸時評　三つの楔	S17-03	90-94	5/159（2）	0.6
◎	田畑修一郎	文芸時評　額に汗する仕事	S17-03	94-97	4/159（2）	0.6
◎	窪川鶴次郎	文芸時評　自己閉塞の現状	S17-03	97-100	5/159（2）	0.6
◎	岡田三郎	文芸時評　「灘」にことよせて	S17-04	88-91	4/160（2）	0.6

◎	新田潤	文芸時評　どうしたらいいか	S17-04	91-94	4/160（2）	0.6
◎	高木卓	文芸時評　ともに揺れつつ	S17-05	100-103	4/160（2）	0.6
◎	浅見淵	文芸時評　大陸文化について	S17-05	103-106	4/160（2）	0.6
◎	伊藤整	文芸時評　歴史の意識	S17-06	94-97	4/160（2）	0.6
◎	小田切秀雄	文芸時評　行文のこと	S17-06	97-100	4/160（2）	0.6
◎	山室静	文芸時評　欲の深さに就て	S17-07	110-114	5/160（2）	0.6
◎	上林暁	文芸時評　文学の振・不振の問題	S17-07	114-117	4/160（2）	0.6
◎	徳田一穂	文芸時評　今日に生きる	S17-08	94-97	4/160（2）	0.6
◎	那須辰造	文芸時評　執着の文学と栄光の文学	S17-08	97-100	4/160（2）	0.6
◎	澁川驍	文芸時評　作者の観念と人間	S17-09	78-81	4/160（2）	0.6
◎	岩上順一	文芸時評　文学の世界観	S17-09	82-85	4/160（2）	0.6
◎	伊藤永之介	文芸時評　主観性の衰弱	S17-10	92-95	4/160（2）	0.6
◎	西村孝次	文芸時評　国語荘厳	S17-10	95-99	5/160（2）	0.6
◎	石川淳	文芸時評　善隣の文化に就いて	S17-11	90-94	5/160（2）	0.6
◎	麻生種衛	文芸時評　片隅から	S17-11	94-98	5/160（2）	0.6
◎	中谷孝雄	文芸時評　小説月評その他	S17-12	78-81	4/144（2）	0.6
◎	森本忠	文芸時評　国語問題始末	S17-12	82-85	4/144（2）	0.6
◎	福田恆存	文芸時評　文学至上主義的風潮について	S18-02	38-42	5/128（2）	0.6
◎	宮内寒彌	文芸時評　或る暗示	S18-02	42-45	4/128（2）	0.6
◎	高木卓	文芸時評　作用力の乏しさ	S18-03	74-76	3/127（2）	0.6
◎	森山啓	文芸時評　若々しさの必要	S18-03	77-80	4/127（2）	0.6
◎	中山義秀	文芸時評　前夜の感想	S18-04	8-11	4/128（2）	0.6
◎	上林暁	文芸時評　横光・川端	S18-04	11-14	4/128（2）	0.6
▲	岡田三郎・伊藤整	三月の小説 ── 対談月評 ──	S18-04	72-78	7/128（3）	0.6
▲	岡田三郎・高見順・伊藤整	四月の小説 ── 鼎談月評 ──	S18-05	86-94	9/176（3）	0.8
▲	岡田三郎・高見順・伊藤整	五月の小説 ── 鼎談月評 ──	S18-06	56-63	8/96（3）	0.5
▲	伊藤整	六月の作品評	S18-07	47-51	3/80（3）	0.5
◎	澁川驍	文芸時評　歴史的感動と生活	S18-08	53-55	3/80（3）	0.5
◎	原奎一郎	文芸時評　文学者の血路	S18-08	55-57	3/80（3）	0.5
◎	高木卓	「いのちながさ」について ── 文芸時評 ──	S18-09	52-55	4/80（3）	0.5
◎	平野仁啓	文芸時評　民族と文学	S18-10	48-50	3/80（3）	0.5
◎	青柳優	文芸時評　死生の間	S18-10	50-51	2/80（3）	0.5
▲	浅見淵	小説月評	S19-02	40-43	4/72（4）	0.5

◎	中村地平	ベルツの日記 ── 文芸時評 ──	S19-04	34-37	4/72（2）	0.5
▲	青柳優	三月小説評	S19-04	42-43	2/72（4）	0.5
◎	本多顯彰	青年文学者たち ── 文芸時評 ──	S19-06	28-30	3/57（3）	0.5

＊昭和 20 年 3 月号まで刊行。

昭和 10 年代の『新潮』を通覧したところ，81 本の「文芸時評」にくわえ，66 本の月評類があり，あわせればのべ 147 本の文芸時評（類）が掲載されており，これは現在まで調査対象とした総合雑誌・文芸雑誌を通じて最多である。1 ト月に複数の掲載もあったにせよ，この期間の刊行数が 123 冊であることを思えば，1 冊あたり 1.2 本の文芸時評（類）が掲載された計算になる。

全体としては，まず昭和 10～13 年にかけて「文芸時評」がほぼ毎号に掲載，つづいてそれと重なるように昭和 11 年末～16 年末にかけて月評類が持続的に掲載され，最後に昭和 17 年からは再び復活した文芸時評（類）が断続的に掲載されていた。

執筆者・誌面構成に関していえば，昭和 10 年代前半の「文芸時評」は，小説家，批評家が複数回連続して担当することが多く，いずれも 2 段組，8 ページ前後で構成されている。登場回数でいえば尾崎士郎の 6 回が最多で，岡田三郎，本多顯彰の 4 回がつづき，他に 3 回の執筆者が複数いる（川端康成，河上徹太郎，中野重治）。昭和 10 年代半ばの月評類は，①名取勘助「小説月評」（S11. 10～S13. 10，25 回），②神田鵜平「創作時評」（S13. 11～S14. 12，14 回），③嵯峨傳「創作月評」（S15. 1～S15. 12，11 回），④石田英二郎「*n*（漢数字）月の小説」（S16. 2～S16. 10，8 回）と看板を転じながら継続され，いずれにおいても 3 段組，4 ページを標準として構成されていた。昭和 10 年代終盤の「文芸時評」になると，文芸時評という枠組みの中，複数の執筆者による別タイトルの文章で構成をとることが多くなる。原則は 2 段組で，8 ページほどの紙幅がとられることが多く，執筆者はまちまちである。昭和 18 年以降は，掲載は不定期，体裁もそのつどとなり，継続性はみられなくなっていく。

こうした文芸時評（類）の消長に関して，本多顯彰は「文芸雑誌について」（『新潮』S18. 5）で「創作月評」にふれて，《本誌に連載された名取勘助の月評は，その評に賛成すると否とに拘らず，非常に便利なもの》で《何人もその労力と愛情とに敬意を表したものだつた》，《今にして，六号活字で組まれたあの月評の果してゐた役割がどんなに大きかつたかを思ひ当る》（34 頁）と振り返っている。昭和 10 年代後半の展開は，やはり急だったのだ。

2-2：『文藝』

文芸復興の気運に乗じて昭和 8 年 11 月に創刊された『文藝』は，《創作・評論を中心として，詩，時評，外国文学の紹介・解説・批評，美術・音楽評論などを主とし特定の文学傾向を持たず，この時期の最も権威ある文芸雑誌の一つとなった》[5]，《多角的な視点の上に立つ幅広い総合文芸雑誌をめざして，昭和十年代の最も権威ある商業文芸雑誌としての特徴を発揮した》[6]と評されるなど，文芸誌としての最高ランクという評価は定着している。

『文藝』の昭和 10 年代における文芸時評（類）の掲載状況については，下記の［表 2］にまとめた。

［表 2（『文藝』）］

種別	署名	題　　名	掲載月	掲載頁	当該頁／総頁（段組数）	価格
◎	長與善郎	文芸時評	S10-01	130-135	6/376（2）	0.8

◎	荒木巍	文芸時評	S10-02	39-44	6/240（2）	0.5
◎	青野季吉	文芸時評	S10-03	139-144	6/288（2）	0.6
◎	細田民樹	文芸時評	S10-04	64-70	7/400（2）	0.8
◎	上司小剣	文芸時評　歌合せに擬して	S10-05	132-138	7 /304（2）	0.6
◎	新居格	文芸時評	S10-06	67-71	5/320（2）	0.6
◎	徳永直	文芸時評　明るさを求めて	S10-07	42-44	3/304（3）	0.6
▲	牧野信一	浪曼的時評	S10-08	38-44	7/304（2）	0.6
◎	伊藤整	文芸時評	S10-09	26-33	8/304（2）	0.6
◎	高見順	文芸時評	S10-10	182-187	6/368（2）	0.8
◎	貴司山治	文芸時評	S10-11	99-104	6/304（2）	0.6
◎	板垣直子	文芸時評 ── 停滞と闘争 ──	S10-12	143-150	8/304（2）	0.6
◎	杉山平助	文芸時評	S11-01	117-122	6/384（2）	0.8
◎	森山啓	文芸時評	S11-02	110-117	8/304（2）	0.6
◎	尾崎士郎	文芸時評	S11-03	163-168	6/304（2）	0.6
◎	江口渙	文芸時評	S11-04	87-94	8/384（2）	0.8
◎	伊藤整	文芸時評	S11-05	74-80	7/292（2）	0.6
◎	板垣直子	文芸時評	S11-06	75-82	8/304（2）	0.6
◎	新居格	文芸時評	S11-07	192-197	6/284（2）	0.6
◎	高見順	文芸時評	S11-08	246-252	7/360（2）	0.8
▲	麻四門	小説採点簿	S12-02	44-50	7/248（3）	0.6
▲	麻四門	小説採点簿	S12-03	74-79	6/244（3）	0.6
▲	麻四門	小説採点簿	S12-04	104-110	7/316（3）	0.8
▲	麻四門	小説採点簿	S12-05	92-98	7/260（3）	0.7
▲	麻四門	小説採点簿	S12-06	81-87	7/232（3）	0.6
▲	麻四門	小説採点簿	S12-07	99-104	6/236（3）	0.6
▲	麻四門	小説採点簿　批評に基準ありや	S12-08	93-98	6/308（3）	0.8
▲	芝左内	小説採点簿	S12-09	173-177	5/240（3）	0.6
▲	森山啓	小説月旦	S12-10	122-128	7/236（3）	0.6
▲	森山啓	小説月旦	S12-11	147-153	7/296（3）	0.8
◎	中村光夫	文芸時評 ──「生活の探求」と「幸福」	S13-01	270-277	8/348（2）	1
◎	中村光夫	文芸時評	S13-02	224-229	6/232（2）	0.6
◎	亀井勝一郎	かの子と葦平（文芸時評）	S13-04	22-27	6/314（2）	0.8
◎	亀井勝一郎	同胞愛に生きよ（文芸時評）	S13-05	36-42	7/256（2）	0.65
▲	K・L・M	創作月評	S13-05	108-112	5/256（3）	0.65
◎	鶴田知也	文学に於ける主張性（文芸時評）	S13-06	184-189	6/260（2）	0.65

▲	三戸斌	創作月評	S13-06	228-232	5/260（3）	0.65
▲	三戸斌	創作月評	S13-07	110-114	5/312（3）	0.8
▲	三戸斌	創作月評	S13-08	204-208	5/240（3）	0.6
▲	三戸斌	創作月評	S13-09	246-250	5/256（3）	0.65
▲	三戸斌	創作月評	S13-10	284-288	5/340（3）	0.85
◎	三枝博音	戦線と銃後と批評と ── 文芸時評 ──	S13-11	140-149	10/280（2）	0.7
▲	三戸斌	創作月評	S13-11	273-278	6/280（3）	0.7
▲	三戸斌	創作月評	S13-12	222-227	6/240（3）	0.6
◎	上林暁	外的世界と内的風景（文芸時評）	S14-01	278-284	7/392（2）	1
▲	天下泰平	創作月評	S14-01	381-385	5/392（3）	1
◎	上林暁	純粋への郷愁（文芸時評）	S14-02	132-138	7/240（2）	0.6
▲	天下泰平	創作月評	S14-02	193-201	9/240 （2/3 変[7]）	0.6
◎	上林暁	文学の歓びと苦しみについて （文芸時評）	S14-03	228-234	7/280（2）	0.7
▲	天下泰平	創作月評	S14-03	254-261	8/280 （2/3 変）	0.7
◎	大山定一	芸術主義の再出発（文芸時評）	S14-04	146-152	7/256（2）	0.65
▲	天下泰平	創作月評	S14-04	234-238	5/256（3）	0.65
◎	大山定一	形式への意志（文芸時評）	S14-05	186-191	6/296（2）	0.75
▲	天下泰平	創作月評	S14-05	280-287	8/296 （2/3 変）	0.75
◎	大山定一	戦争と文学（文芸時評）	S14-06	24-30	7/256（2）	0.65
▲	鬼頭史郎	作品月評	S14-06	244-248	5/256（3）	0.65
◎	北原武夫	思想の剝製（文芸時評）	S14-07	30-36	7/280（2）	0.7
◎	北原武夫	文学者の精神（文芸時評）	S14-08	114-120	7/304（2）	0.8
▲	鬼頭史郎	作品月評	S14-08	214-221	8/304 （2/3 変）	0.8
◎	北原武夫	スタイル論（文芸時評）	S14-09	30-36	7/240（2）	0.6
▲	鬼頭史郎	作品月評	S14-09	226-230	5/240 （2/3 変）	0.6
◎	中島健蔵	新手の必要（文芸時評）	S14-10	274-280	7/312（2）	0.8
▲	鬼頭史郎	作品月評	S14-10	293-298	6/312 （2/3 変）	0.8
◎	中島健蔵	現代の明るさ（文芸時評）	S14-11	108-112	5/280（2）	0.7
▲	浦島太郎	創作月評	S14-11	228-233	6/280 （2/3 変）	0.7

◎	中島健蔵	新しい人間像（文芸時評）	S14-12	212-217	6/240（2）	0.6
▲	浦島太郎	創作月評	S14-12	230-233	4/240（3）	0.6
◎	中野好夫	フォールスタフ的方法その他（文芸時評）	S15-01	222-230	9/312（2）	0.8
▲	浦島太郎	創作月評	S15-01	256-259	4/312（3）	0.8
◎	中野好夫	文学と宣伝その他（文芸時評）	S15-02	140-148	9/280（2）	0.7
◎	中野好夫	文学と政治その他（文芸時評）	S15-03	226-233	8/272（2）	0.7
▲	N・Y	作品短評　「文藝」「中央公論」作品評	S15-03	127	1/272（3）	0.7
▲	I・S	作品短評　「新潮」「日本評論」作品評	S15-03	225	1/272（3）	0.7
◎	中村武羅夫	文学の転換期（文芸時評）	S15-04	82-88	7/280（2）	0.7
▲	K・K	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S15-04	203	1/280（3）	0.7
▲	T・G	作品短評　「中央公論」「改造」作品評	S15-04	213	1/280（3）	0.7
▲	P・Q	作品短評　「文藝春秋」「日本評論」作品評	S15-04	217	1/280（3）	0.7
◎	中村武羅夫	報告文学と農民文学（文芸時評）	S15-05	240-246	7/272（2）	0.75
▲	Q・P	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S15-05	165	1/272（3）	0.75
▲	T	作品短評　「改造」「中央公論」作品評	S15-05	179	1/272（3）	0.75
▲	M・C・P	作品短評　「日本評論」「文藝春秋」作品評	S15-05	247	1/272（3）	0.75
◎	中村武羅夫	文学の地方分散　文芸時評	S15-06	200-206	7/264（2）	0.7
▲	K・G	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S15-06	207	1/264（3）	0.7
▲	T・M	作品短評　「文藝春秋」「文学界」作品評	S15-06	217	1/264（3）	0.7
▲	G	作品短評　「中央公論」「改造」作品評	S15-06	233	1/264（3）	0.7
◎	中村地平	小説への嫌悪　文芸時評	S15-07	204-208	5/248（2）	0.7
▲	G・K	作品短評　「改造」「中央公論」作品評	S15-07	181	1/248（3）	0.7
▲	H・A	作品短評　「日本評論」「文藝春秋」作品評	S15-07	197	1/248（3）	0.7
▲	K・K	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S15-07	209	1/248（3）	0.7
◎	中村地平	東京の町　文芸時評	S15-08	72-77	6/248（2）	0.7
▲	Y・A	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S15-08	91	1/248（3）	0.7
▲	E・S	作品短評　「改造」「中央公論」作品評	S15-08	155	1/248（3）	0.7
▲	N・O	作品短評　「文藝春秋」「公論」作品評	S15-08	193	1/248（3）	0.7
▲	Q・Q	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S15-09	49	1/240（3）[8]	0.7
▲	W・W	作品短評　「改造」「中央公論」作品評	S15-09	211	1/240（3）	0.7
▲	G・B	作品短評　「文藝春秋」「日本評論」作品評	S15-09	223	1/240（3）	0.7

◎	上田廣	時代への関心　文芸時評	S15-10	74-80	7/280（2）	0.8
▲	M・M	作品短評　「文学界」「新潮」作品評	S15-10	73	1/280（3）	0.8
▲	Z・A	作品短評　「文藝春秋」「文藝」作品評	S15-10	103	1/280（3）	0.8
▲	M・M	作品短評　「改造」「中央公論」作品評	S15-10	213	1/280（3）	0.8
▲	G・K	作品短評　「改造」「中央公論」作品評	S15-11	119	1/232（3）	0.7
▲	T・N	作品短評　「文藝春秋」「文学界」作品評	S15-11	169	1/232（3）	0.7
▲	T・N	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S15-11	177	1/232（3）	0.7
▲	I・Q	作品短評　「改造」「中央公論」作品評	S15-12	153	1/224（3）	0.75
▲	N・O	作品短評　「文藝春秋」「文学界」作品評	S15-12	179	1/224（3）	0.75
▲	N・O	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S15-12	217	1/224（3）	0.75
▲	Y・O	作品短評　「文藝春秋」「文藝」作品評	S16-02	161	1/224（3）	0.7
▲	H・A	作品短評　「新潮」「日本評論」作品評	S16-02	183	1/224（3）	0.7
▲	A・K	作品短評　「改造」「中央公論」作品評	S16-02	221	1/224（3）	0.7
▲	G・G	作品短評　「改造」「文藝」作品評	S16-03	131	1/224（3）	0.7
▲	S・S	作品短評　「文学界」「中央公論」作品評	S16-03	147	1/224（3）	0.7
▲	T・Y	作品短評　「文藝春秋」「新潮」作品評	S16-03	179	1/224（3）	0.7
▲	P・T	作品短評　「文藝春秋」「中央公論」作品評	S16-04	111	1/216（3）	0.7
▲	K・O・K	作品短評　「改造」「文学界」作品評	S16-04	179	1/216（3）	0.7
▲	S・O・S	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S16-04	215	1/216（3）	0.7
▲	F・G・F	作品短評　「文藝」「新潮」作品評	S16-05	181	1/232（3）	0.75
▲	M・N・M	作品短評　「改造」「文藝春秋」作品評	S16-05	189	1/232（3）	0.75
▲	H・I・H	作品短評　「中央公論」「文学界」作品評	S16-05	229	1/232（3）	0.75
◎	中山義秀	文芸時評	S16-06	74-79	6/232（2）	0.75
◎	榊山潤	歴史小説の薄弱性（文芸時評）	S16-07	57-61	5/240（2）	0.75
◎	伊藤整・平野謙	対談　文芸時評	S17-03	98-110	13/144（3）	0.6
◎	日比野士朗	報道と文学　文芸時評	S17-04	80-83	4/160（2）	0.6
◎	上林暁	文学的冒険者（文芸時評）	S17-06	38-43	6/128（2）	0.5
◎	伊藤整	報道文の性格（文芸時評）	S17-10	41-45	5/144（2）	0.6
◎	上林暁	文芸時評	S18-03	20-23	4/128（2）	0.6
◎	愈鎮午	作家と気魄（文芸時評）	S18-04	64-67	4/128（2）	0.6
◎	北原武夫	薔薇について（文芸時評）	S18-05	32-34	3/64（2）	0.5

◎	浅見淵	文芸時評[9]	S18-08	48-51	4/64（3）	0.45
◎	中村地平	観念と実践（文芸時評）	S18-11	16-19	4/64（2）	0.45
▲	澁川驍	新年号の小説	S19-02	24-25	2/64（3）	0.45
▲	宮内寒彌	二月の小説	S19-03	24-25	2/64（3）	0.45
▲	田宮虎彦	三月号の小説	S19-04	38-39	2/64（3）	0.5
▲	伊藤佐喜雄	四月号の作品	S19-05	20-21	2/32（3）	0.5
◎	山本健吉	戦記と小説手法　文芸時評	S19-07	38-40	3/40（4）	0.5

＊昭和 19 年 7 月号まで刊行。

昭和 10 年代の『文藝』を通覧したところ，58 本の「文芸時評」に，76 本の月評・短評類があり，あわせればのべ 134 本の文芸時評（類）が掲載されており，『新潮』につぐ掲載数となっている。『文藝』誌上では，形をかえながら，昭和 16 年半ばまではコンスタントに文芸時評（類）が掲載されており，7 ヶ月のブランクをへた後にも，（掲載頻度は一挙に減じるものの）昭和 19 年半ばまで間歇的な掲載はつづいていた。

全体の流れとしては，まず昭和 10 年から 11 年 8 月号まで「文芸時評」が毎号掲載され，昭和 12 年 2 月号からは「小説採点簿」，「小説月旦」が挟まれ，昭和 13 年 1 月号から「文芸時評」が復活する。ただし，掲載は不定期で，その代わりのように「創作月評」，「作品月評」が併載される時期が昭和 15 年 2 月号までつづく。新たなスタイルが定まるのは昭和 15 年 3 月号からで，「文芸時評」と「作品短評」がセットで掲載され，8 月号までつづく。その後，10 月号にも同じスタイルがみられるが，昭和 15 年 11 月以降は 2〜3 誌をとりあげた「作品短評」が複数ならぶかたちが昭和 16 年 5 月号までつづく。昭和 16 年 6 月号からは，7 ヶ月に及ぶ文芸時評（類）が掲載されない期間を挟みながらも，昭和 10 年代末に「文芸時評」が 12 本掲載された点は特筆されてよい（その間，4 回の作品月評も挟まれる）。

執筆者・誌面構成に関していえば，昭和 10 年代前半の「文芸時評」は，小説家，批評家が担当し，昭和 13 年以降は複数回連続して執筆するケースが多い。いずれも 2 段組，6 ページ前後で構成されている（なお，昭和 10 年代末には 4 ページ前後に縮小される）。文芸時評以外のものは原則として 3 段組で，「小説採点簿」は 6〜7 ページ，「小説月旦」は 7 ページ，「創作月評」と「作品月評」は 5〜8 ページ，「作品短評」は各 1 ページとなっている。

2-3：『文学界』

『文藝』同様に，文芸復興の気運のもとで昭和 8 年 10 月に創刊された『文学界』は，当初文化公論社から発刊された。《芸術派，転向文学者，既成リアリズム作家の三派がここに拠って，擡頭するファシズムと，その文化破壊から，文学，芸術をまもろうとする姿勢を示した》と特徴づけられる同誌だが，昭和 11 年には同人のいれかえと発行所の変更（文藝春秋社）に前後して，《このころから「文学界」は近代文学意識にたって，個人主義と芸術主義を積極的に主張する立場を明確に掲げ，昭和十年代文学に主導的な，きわめて大きな役割をはたす有力雑誌となっていった》[10]と評される通り，大きな影響力を誇った。

『文学界』の昭和 10 年代における文芸時評（類）の掲載状況については，下記の［表 3］にまとめた。

［表 3（『文学界』）］

種別	署名	題　　名	掲載月	掲載頁	当該頁／総頁（段組数）	価格
◎	中村光夫	文芸時評（里見弴）	S10-01	64-80	17/108（2）	0.35
◎	中村光夫	転向作家論 ── 文芸時評 ──	S10-02	74-92	19/129（2）	0.35
◎	中村光夫	思想の盲点 ── 文芸時評 ──	S10-03	61-73	13/114（2）	0.35
◎	中村光夫	中野重治氏に ── 文芸時評 ──	S10-04	50-66	17/105（2）	0.35
◎	中村光夫	純粋小説論について ── 文芸時評 ──	S10-05	24-43	20/74（2）	0.35
◎	中村光夫	生活と制作と ── 文芸時評 ──	S10-06	64-79	16/109（2）	0.35
◎	中村光夫	室生犀星論 ── 文芸時評 ──	S10-08	51-68	18/129（2）	0.35
◎	中村光夫	私小説について ── 文芸時評 ──	S10-09	70-92	23/114（2）	0.5
◎	中村光夫	文学の衰弱 ── 文芸時評 ──	S10-10	95-110	16/132（2）	0.5
◎	中村光夫	文芸時評　レアリズムについて	S10-11	74-91	18/114（2）	0.35
◎	高見順	放胆放題 ── 文芸時評 ──	S11-01	142-155	14/232（2）	0.5
◎	高見順	文章展覧会 ── 文芸時評 ──	S11-02	200-215	16/263（2）	0.5
◎	高見順	時評日誌 ── 文芸時評 ──	S11-03	193-210	18/262（2）	0.5
◎	阿部知二	文芸時評	S11-05	206-215	10/248（2）	0.5
◎	武田麟太郎	文芸時評	S11-07	200-205	6/254（2）	0.5
◎	大岡昇平	文芸時評 ── 小説の問題 ──	S11-08	214-217	4/254（2）	0.5
◎	川端康成	芥川賞予選記 ── 文芸時評 ──	S11-09	181-187	7/286（2）	0.5
◎	河上徹太郎	ヒューマニズムの提唱について ── 文芸時評 ──	S11-10	168-174	7/316（2）	0.6
▲	森山啓	浪曼派の二作品その他	S11-11	168-171	4/264（2）	0.5
◎	亀井勝一郎	文芸時評	S12-02	232-240	9/288（2）	0.5
◎	亀井勝一郎	文芸時評 ── 「花のワルツ」について	S12-03	234-243	10/292（2）	0.5
▲	小林秀雄	文化月報　小説	S12-04	15-18	4/320（3）	0.6
▲	河上徹太郎	文化月報　小説	S12-05	22-25	4/288（3）	0.5
▲	河上徹太郎	文化月報　小説　小説の芸と持ち味	S12-06	17-22	6/288（2/3）	0.5
▲	林房雄	文化月報　小説　時代の暗さと文学	S12-07	21-25	5/280（2/3）	0.5
▲	村山知義	文化月報　小説　新人活躍	S12-08	54-58	5/280（1/2）(11)	0.6
▲	林房雄	文化月報　小説　アンファン・テリイブル（小説に現れた現代青年）	S12-09	213-218	6/288（1/2）	0.6
▲	大岡昇平	文化月報　小説　女流作家のナルシシスム	S12-11	140-144	5/220（1/2）	0.5

▲	林房雄	文化月報　小説　戦争と文学者	S12-12	136-149	14/232 （1/2）	0.5
▲	舟橋聖一	文化月報　小説　小説について	S13-01	216-223	8/288（2）	0.6
▲	芹澤光治良	文化月報　小説　小説月報	S13-02	160-165	6/224（2）	0.5
▲	深田久彌	文化月報　小説　小説月報	S13-03	61-66	6/256（2）	0.6
▲	森山啓	文化月報　小説　諸作家の性格 ――小説月報――	S13-05	214-221	8/272（2）	0.6
▲	武田麟太郎	文化月報　小説　小説月報	S13-06	255-262	8/320（2）	0.7
▲	高見順	文化月報　小説　創作月報	S13-07	232-238	7/316（2）	0.7
◎	森山啓	陣中文学と文芸政策 ――（文芸時評）――	S13-09	188-195	8/284（2）	0.6
◎	森山啓	文学上の「健康性」――文芸時評――	S13-11	218-223	6/272（2）	0.6
▲	古谷綱武	十二月の作品から	S14-01	229-233	5/280（2）	0.7
▲	河上徹太郎	新年号の戦争物	S14-02	168-173	6/248（2）	0.6
◎	亀井勝一郎	ハムレットと兵隊――文芸時評――	S14-03	154-159	6/248（2）	0.6
◎	中島健蔵	作家生活論――文芸時評――	S14-04	207-212	6/280（2）	0.7
◎	舟橋聖一	小説家の「カン」の問題 ――文芸時評――	S14-05	199-207	9/240（2）	0.6
◎	河上徹太郎	現代小説の憂欝――文芸時評――	S14-06	179-183	5/248（2）	0.6
◎	中島健蔵	批評の肯定的精神――文芸時評――	S14-07	163-167	5/248（2）	0.6
◎	林房雄	戦争と人間の成長――文芸時評――	S15-01	170-176	7/240（2）	0.6
◎	林房雄	「我」と小説――文芸時評――	S15-02	157-164	8/240（2）	0.6
◎	林房雄	新人の世界――文芸時評――	S15-03	151-158	8/240（2）	0.6
◎	林房雄	満洲作家の小説（文芸時評）	S15-04	145-151	7/280（2）	0.7
▲	林房雄	文化月報（小説月報）　類型の文学	S15-05	125-130	6/240（2）	0.6
▲	亀井勝一郎	文化月報　人間再生の文学	S15-07	123-130	8/240（2）	0.6
◎	河上徹太郎	光栄ある日――文芸時評――	S17-01	2-8	7/160（2）	0.6
◎	河上徹太郎	新しき歴史の心――文芸時評――	S17-02	2-8	7/160（2）	0.6
▲	河上徹太郎	創作の低下について ――時評的雑感――	S17-03	14-17	4/160（2）	0.6
◎	河上徹太郎	前線へ出た「私」　文芸時評	S17-04	12-17	8/152（2）	0.6
◎	河上徹太郎	歴史的方法の勝利――文芸時評――	S17-05	8-13	6/152（2）	0.6
◎	河上徹太郎	古典の発想――文芸時評――	S17-06	5-9	5/152（2）	0.6
▲	河上徹太郎・ 亀井勝一郎	対談時評	S17-11	66-80	15/152（3）	0.6
◎	中村地平	「ボルネオ紀行」から（文芸時評）	S19-04	54-59	6/104（2）	0.6

＊昭和 19 年 4 月号まで刊行。

昭和 10 年代の『文学界』を通覧したところ，37 本の「文芸時評」に，21 本の月評類があり，あわせて 58 本の文芸時評（類）が掲載されていた。量的にも頻度的にも，雑誌の存在感や関わった批評家の顔ぶれからすると，文芸時評（類）の掲載は意想外に少ない。

全体の流れとしては，まず昭和 10 年 1 月号から 11 ヶ月連続で，中村光夫が 20 ページ前後の「文芸時評」を書きつぐところから始まる。その後，昭和 12 年 3 月号まで「文芸時評」が掲載されるが，翌月からは「文化月報」がはじまり，昭和 15 年 7 月号まで間歇的に掲載される。その間にも昭和 14 年 3 月号～昭和 15 年 4 月号までは連続して「文芸時評」が書かれ，1 年半ほど間をあけて，昭和 17 年 1 月号から文芸時評（類）が連続して掲載されていく。

執筆者・誌面構成に関していえば，批評家が主な執筆者で，河上徹太郎の 12 回を筆頭に，中村光夫 10 回，林房雄が 8 回など，限られた書き手が担当するケースが多い。逆に，小林秀雄の登場が 1 回にとどまっていることにも注目しておきたい。「文芸時評」は 2 段組で，昭和 10 年代前半は 10 ページ前後，後半になると 6～8 ページ程度の紙幅となっている。「文化月評」については，誌面構成もページ数もさまざまで形式的な連続性はみられない。

2-4：『若草』

大正 14 年 10 月に創刊された『若草』は，当初『令女界』姉妹雑誌として刊行され，《いわゆる少女小説の流行に寄与するところが大きかった》[12]雑誌だが，創刊の翌年には文芸雑誌と扱われるようになり，昭和 10 年代に入ると《「若草」は文芸雑誌として唯一の黒字雑誌と云はれてゐる》（勝本清一郎「文学雑誌論（雑誌時評）」，『日本評論』S10. 10，505 頁）と評されるようになっていた。

『若草』の昭和 10 年代における文芸時評（類）の掲載状況については，下記の［表 4］にまとめた。

［表 4（『若草』）］

種別	署名	題　　名	掲載月	掲載頁	当該頁／総頁（段組数）	価格
◎	深田久彌	文芸時評	S10-03	82-87	6/176（2）	0.3
▲	北岡史郎	「池谷賞」と新人	S12-01	150-151	2/236（3）	0.6
▲	北岡史郎	作家と信念	S12-02	58-59	2/180（3）	0.35
▲	北岡史郎	思想する小説	S12-03	62-63	2/180（3）	0.35
○	北岡史郎	文壇時評	S12-04	154-155	2/236（3）	0.45
○	北岡史郎	文壇時評	S12-05	88-89	2/180（3）	0.35
○	北岡史郎	文壇時評	S12-06	60-61	2/180（3）	0.35
○	北岡史郎	文壇時評　文学の大衆性の問題	S12-07	124-125	2/180（3）	0.35
○	北岡史郎	文壇時評	S12-08	98-99	2/180（3）	0.35
○	北岡史郎	文壇時評　長篇小説の収獲	S12-09	110-111	2/164（3）	0.35
○	北岡史郎	文壇時評　新文化への眺望	S13-01	178-179	2/220（3）	0.45
○	北岡史郎	文壇時評　日支の文化的提携	S13-02	96-97	2/164（3）	0.35
○	北岡史郎	文壇時評　文芸の恢復	S13-04	168-169	2/220（3）	0.45
○	北岡史郎	文壇時評　個性の問題と文壇	S13-06	110-111	2/164（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　思想と創造の季節	S13-07	66-67	2/164（3）	0.4

○	北岡史郎	文壇時評　現下の文壇	S13-08	112-113	2/164（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　八月の創作	S13-09	70-71	2/164（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　九月の創作	S13-10	112-113	2/164（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　十月の創作	S13-11	96-97	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　十一月の創作	S13-12	66-67	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　十二月の創作	S14-01	124-125	2/196（3）	0.5
○	北岡史郎	文壇時評　従軍作家の三収穫	S14-02	94-95	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　二月の創作	S14-03	60-61	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　三月の創作	S14-04	72-73	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　四月の文壇	S14-05	36-37	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　六月の創作	S14-07	104-105	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　七月の創作	S14-08	62-63	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　八月の文壇	S14-09	100-101	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　九月の文壇	S14-10	66-67	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　十月の文壇	S14-11	96-97	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　十一月の文壇	S14-12	62-63	2/156（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評	S15-01	60-61	2/196（3）	0.5
○	北岡史郎	二月の文壇（文壇時評）	S15-03	98-99	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	三月の文壇（文壇時評）	S15-04	58-59	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	四月の文壇（文壇時評）	S15-05	60-61	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	五月の文壇（文壇時評）	S15-06	84-85	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	六月の文壇（文壇時評）	S15-07	56-57	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	七月の文壇（文壇時評）	S15-08	80-81	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	八月の文壇（文壇時評）	S15-09	80-81	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	九月の文壇（文壇時評）	S15-10	96-97	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	十月の文壇（文壇時評）	S15-11	66-67	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	十一月の文壇（文壇時評）	S15-12	66-67	2/140（3）	0.4
○	北岡史郎	文壇時評　十二月の文壇	S16-01	96-97	2/176（3）	0.5
◎	市川為雄	近頃文壇の快事不快事 ── 文芸時評 ──	S18-09	16-17	2/56（3）	0.36

＊昭和 19 年 3 月号まで刊行（S18-12 は休刊）。

昭和 10 年代の『若草』を通覧すると，昭和 10 年 3 月号と昭和 18 年 9 月号の「文芸時評」に挟まれるようにして，昭和 12 年 1 月号から 3 冊の助走をへて，昭和 12 年 4 月号より昭和 16 年 1 月号まで，集中的に「文壇時評」39 本[13]が掲載されていたことが，何よりの特徴である[14]。これは例外なく 3 段組み・見開き 2 ページで構成され，網羅的な作品月評への志向性は弱く，その時々に文学場で話題になっていた作家・作品・トピックに絞った論述が主で，タイトル通りの「文壇時評」が展開されていたと

いえる[15]。

2-5：『作品』

昭和 5 年 5 月に創刊された『作品』は，《創刊時から昭和一〇年前後にかけて「作品」は純文学のエスプリを貫いたとみてとれる》[16]ばかりでなく，P・Q・R「同人雑誌展望」（『文藝通信』S9.2）において《同人雑誌といふよりはもう一廉の文芸雑誌》（45 頁）だと評されてもいた。また，『作品』は，昭和 10 年前後には新人の檜舞台としても機能していた[17]。

『作品』の昭和 10 年代における文芸時評（類）の掲載状況については，下記の［表 5］にまとめた。

［表 5（『作品』）］

種別	署名	題　　名	掲載月	掲載頁	当該頁／総頁（段組数）	価格
◎	中村地平	文芸時評　雑記（「行動」及び「文藝」評）	S10-01	145-146	2/150（3）	0.45
◎	岡村政司	文芸時評　鬼涙村その他	S10-01	147-148	2/150（3）	0.45
◎	上林暁	文芸時評　「文藝春秋」	S10-02	152-154	3/164（3）	0.45
◎	中山義秀	文芸時評　「早稲田文学」	S10-02	154-156	3/164（3）	0.45
◎	坂口安吾	文芸時評　悲願に就て	S10-03	85-92	8/150（3）	0.4
◎	大岡昇平	文芸時評　「新潮」	S10-03	92-94	3/150（3）	0.4
◎	古谷綱武	文芸時評　若き評論家について	S10-03	94-96	3/150（3）	0.4
◎	小野松二	文芸時評　文芸雑誌について	S10-04	119-122	4/151（3）	0.4
◎	新明正道	文芸時評　理論の反省と疎外	S10-04	122-124	3/151（3）	0.4
◎	古谷綱武	文芸時評　「行動」を読む	S10-04	124-126	3/151（3）	0.4
◎	中山義秀	文芸時評　「作品」の評論と小説について	S10-04	126-128	3/151（3）	0.4
◎	岡村政司	文芸時評　「早稲田文学」	S10-04	128-130	3/151（3）	0.4
◎	坂口安吾	文芸時評　枯淡の風格を排す	S10-05	41-48	8/151（3）	0.4
◎	新明正道	文芸時評　感覚と復讐	S10-07	140-141	2/155（2）	0.45
◎	中島健蔵	文芸時評	S10-08	124-128	5/145（2）	0.4
◎	古谷綱武	文芸時評	S10-09	111-115	5/131（2）	0.4
◎	古谷綱武	文芸時評	S10-10	79-81	3/150（2）	0.45
◎	古谷綱武	文芸時評	S10-11	100-105	6/126（2）	0.4
◎	古谷綱武	文芸時評	S10-12	83-88	6/131（2）	0.4
◎	古谷綱武	作品批評の衰微　文芸時評	S11-01	140-148	9/186（2）	0.6
◎	古谷綱武	文芸時評　病床覚え書	S11-02	119-121	3/142（2）	0.4
◎	古谷綱武	文芸時評　「バツタリ」釈義	S11-03	91-94	4/137（2）	0.4
◎	古谷綱武	文芸時評　純文学の萎縮	S11-04	47-53	7/126（2）	0.4

◎	井汲清治	文芸時評　公式と事実と夢	S13-01	75-77	3/149 （2/3 変）	0.6
◎	山岸外史	文芸時評　戦争と文学に就て	S13-01	77-80	4/149 （2/3 変）	0.6
◎	吉岡修一郎	文芸時評　文学偶感	S13-03	16-18	3/35 （2/3 変）	0.15
◎	長谷川鑛平	文芸時評　批評文学者・古谷綱武	S13-03	19-23	5/35 （2/3 変）	0.15
◎	石山徹郎	文芸時評	S13-06	7-12	6/45 （1/3 変）(18)	0.2
◎	福田清人	文芸時評　純粋の誘惑	S13-07	19-21	3/42 （2/3 変）	0.2
◎	瀬沼茂樹	文芸時評　知識人の文学	S13-07	21-24	4/42 （2/3 変）	0.2
◎	波多野完治	文芸時評　徳永直氏の「陽子・道代・町子」	S13-08	31-34	4/38 （2/3 変）	0.2
◎	池島重信	文芸時評　文学以上	S13-09	23-24	2/43（2）	0.2
◎	波多野完治	文芸時評　坪田譲治氏の「胡蝶と鯉」	S13-10	21-23	3/41（2）	0.2
◎	保田與重郎	文芸時評　戦争文章異見	S13-11	18-19	2/41（2）	0.2
◎	小口優	文芸時評　文学の革新	S13-11	20-22	3/41（2）	0.2
◎	本庄陸男	文芸時評　文学者に年金を与へよ	S13-12	30-31	2/46（2）	0.25
◎	山岸外史	文芸時評　文芸時評と題して	S13-12	31-33	3/46（2）	0.25
◎	今日出海	文芸時評　文学の季節	S14-01	49-50	2/58（2）	0.25
◎	田邊耕一郎	文芸時評　戦争と詩想	S14-01	50-52	3/58（2）	0.25
◎	瀬沼茂樹	文芸時評　生れ出づる悩み	S14-02	20-22	3/34 （2/3 変）	0.2
◎	網野菊	文芸時評　女流作家	S14-02	23-25	3/34 （2/3 変）	0.2
◎	長谷川鑛平	文芸時評　『新篇路傍の石』	S14-03	22-24	3/35 （2/3 変）	0.2
◎	石川鈴子	文芸時評　会話のことなど	S14-04	22-25	4/33 （2/3 変）	0.15
◎	亀井勝一郎	文芸時評　人生論の必要	S14-05	22-23	2/38（2）	0.15
◎	井汲清治	文芸時評　ジヤーナリズム	S14-06	31-33	3/43 （2/3 変）	0.15
◎	山岸外史	文芸時評　批評その他	S14-07	26-28	3/41 （2/3 変）	0.15
◎	田邊耕一郎	文芸時評　不老の青春	S14-09	21-24	4/36 （2/3 変）	0.15

◎	芳賀檀	文芸時評　信念の場合	S14-10	21-22	2/44 （2/3 変）	0.2
◎	長谷川鑛平	文芸時評　『風雪』読後	S14-12	21-23	3/50（2）	0.2
◎	山岸外史	文芸時評　力の時代	S15-03	22-24	3/50（2）	0.25
◎	田邊耕一郎	文芸時評　批評と放言	S15-03	24-26	3/50（2）	0.25

＊昭和 15 年 4 月号まで刊行。

昭和 10 年代の『作品』を通覧すると，51 本の「文芸時評」が掲載されていた。本稿の調査期間の半ば過ぎに休刊を迎えてしまうが，昭和 11 年 5 月号～昭和 12 年 12 月号までのブランクを除けば，継続的に「文芸時評」が掲載されていく。「文芸時評」という枠組みの中で，複数の著者がそれぞれに「文芸時評」を書くケースが多かったゆえもあるが，52 冊刊行された雑誌に 51 本の「文芸時評」であるから，ならせば毎号掲載されていたことになる。

特筆すべきは，そのうちの 2 割にあたる 10 本の「文芸時評」を，昭和 10 年代初頭に古谷綱武が書きついでいたことである。逆に，それ以降は，複数回登場した執筆もいるが，連続して掲載されることはなく，多くの書き手が登場して筆を執っていた。

2-6：『文学者』

同人雑誌『文学者』は，伊藤整をはじめとした 22 名の同人によって昭和 14 年 1 月に創刊された。その顔ぶれについては，《よく言えばいわゆる〈非『文学界』派〉の大同団結であり，わるく言えば雑多なグループの〈寄合世帯〉ともいうべき構成》[19]と評されている。

『文学者』の昭和 10 年代における文芸時評（および，それに類するもの）の掲載状況については，下記の［表 6］にまとめた。

［表 6（『文学者』）］

種別	署名	題　　名	掲載月	掲載頁	当該頁／総頁 （段組数）	価格
◎	伊藤整	文芸時評　「文学界」「日本評論」	S14-01	66-68	3/142（2）	0.4
◎	田邊茂一	文芸時評　「中央公論」「文藝春秋」「改造」	S14-01	68-70	3/142（2）	0.4
◎	窪川鶴次郎	文芸時評　「新潮」「文藝」	S14-01	70-74	5/142（2）	0.4
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-02	135-142	8/144（2）	0.5
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-03	148-159	12/204（2）	0.5
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-04	218-225	8/226（2）	0.5
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-05	210-219	10/220（2）	0.5
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-06	225-229	5/230（2）	0.5
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-07	196-200	5/201（2）	0.5
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-08	193-198	6/200（2）	0.5
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-09	185-190	6/192（2）	0.5
◎	田邊茂一	文芸時評	S14-10	195-199	5/200（2）	0.5

◎	田邊茂一	文芸時評	S14-11	208-215	8/216（2）	0.5
◎	尾崎一雄	文芸時評 ――「マメ」と「怠惰」――	S15-01	241-245	5/246（2）	0.6
◎	中村地平	文芸時評	S15-02	220-233	14/234（2）	0.6
◎	浅見淵	文芸時評	S15-03	230-237	8/238（2）	0.6
◎	田邊茂一	文芸時評	S15-04	242-245	4/246（2）	0.6
◎	伊藤整	文芸時評	S15-05	222-230	9/232（2）	0.6
◎	逸見廣	文芸時評	S15-06	222-230	9/232（2）	0.6
◎	岩上順一	文芸時評	S15-07	232-241	10/242（2）	0.6
◎	井上友一郎	文芸時評	S15-08	215-223	9/224（2）	0.6
◎	伊藤整	文芸時評――小説と模様――	S15-09	228-235	8/236（2）	0.6
◎	福田清人	文芸時評	S15-10	220-227	8/228（2）	0.6
◎	宮内寒彌	文芸時評――新人について――	S15-11	196-205	10/206（2）	0.6
◎	三上秀吉	文芸時評	S15-12	203-211	9/212（2）	0.6
◎	平野謙	文芸時評――作家の個性――	S16-01	252-257	6/258（2）	0.8
◎	青野季吉	小説と現実の人間 ――（文芸時評）――	S16-03	202-210	9/212（2）	0.6

＊昭和 16 年 3 月号まで刊行。

昭和 10 年代の『文学者』においては，27 本の「文芸時評」が掲載された。昭和 14 年 1 月に創刊から，わずか 27 ヶ月しか刊行されなかった『文学者』だが，精力的に「文芸時評」が掲載され，平均でいえば毎号掲載されていた計算になる（未掲載だったのは 2 号のみ）。

特筆すべきは，そのうちの 4 割をこえる 12 本の「文芸時評」を，雑誌の中心メンバーである田邊茂一が執筆していたことである。また，4〜14 ページの充実した紙幅が割かれていたことも，あえて昭和 10 年代半ばに創刊された雑誌の性格づけがうかがえるようである。

3

最後に，文芸雑誌 6 誌を調査対象として行った本稿の文芸時評（(類）に関する調査を，掲載状況に絞って改めて［表 7］として掲出し，少しく考察をくわえておきたい。

「刊行年月」は，当該雑誌の奥付上の刊行年月を，昭和を「S」と略記して示した。また，各誌名欄の記号は，「文芸時評」と明示されていれば◎，明示はないものの，それに類すると判断できたものは○，月評形式をとった文学・文壇関連記事は▲と記し，掲載のない場合は－で示した。掲載誌数は，当該月に刊行されていた文芸誌数を分母，そのうち，文芸時評（および，それに類するもの）が何かしらでも掲載されていた雑誌数を分子として，本稿で調査対象とした文芸誌全体の掲載状況を示した。

［表７（一覧）］

刊行年月	『新潮』	『文藝』	『文学界』	『若草』	『作品』	『文学者』	掲載誌数
S10-01	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S10-02	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S10-03	◎	◎	◎	◎	◎		5／5
S10-04	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S10-05	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S10-06	◎	◎	◎	—	—		3／5
S10-07	◎	◎	—	—	◎		3／5
S10-08	◎	▲	◎	—	◎		4／5
S10-09	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S10-10	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S10-11	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S10-12	◎	◎	—	—	◎		3／5
S11-01	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S11-02	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S11-03	◎	◎	◎	—	◎		4／5
S11-04	◎	◎	—	—	◎		3／5
S11-05	◎	◎	◎	—	—		3／5
S11-06	◎	◎	—	—	—		2／5
S11-07	◎	◎	◎	—	—		3／5
S11-08	◎	◎	◎	—	—		3／5
S11-09	◎	—	◎	—	—		2／5
S11-10	◎・▲	—	◎	—	—		2／5
S11-11	◎・▲	—	▲	—	—		2／5
S11-12	◎・▲	—	—	—	—		1／5
S12-01	◎・▲	—	—	▲	—		2／5
S12-02	◎・▲	▲	◎	▲	—		4／5
S12-03	◎・▲	▲	◎	▲	—		4／5
S12-04	◎・▲	▲	▲	○	—		4／5
S12-05	◎・▲	▲	▲	○	—		4／5
S12-06	◎・▲	▲	▲	○	—		4／5
S12-07	◎・▲	▲	▲	○	—		4／5
S12-08	◎・▲	▲	▲	○	—		4／5
S12-09	◎・▲	▲	▲	○	—		4／5
S12-10	◎・▲	▲	—	—	—		2／5

S12-11	◎・▲	▲	▲	—	—		3／5
S12-12	▲	—	▲	—	—		2／5
S13-01	▲	◎	▲	○	◎		5／5
S13-02	◎・▲	◎	▲	○	—		4／5
S13-03	◎・▲	—	▲	—	◎		3／5
S13-04	◎・▲	◎	—	○	—		3／5
S13-05	◎・▲	◎・▲	▲	—	—		3／5
S13-06	◎・▲	◎・▲	▲	○	◎		5／5
S13-07	◎・▲	▲	▲	○	◎		5／5
S13-08	◎・▲	▲	—	○	◎		4／5
S13-09	◎・▲	▲	◎	○	◎		5／5
S13-10	◎・▲	▲	—	○	◎		4／5
S13-11	▲	◎・▲	◎	○	◎		5／5
S13-12	▲	▲	—	○	◎		4／5
S14-01	▲	◎・▲	▲	○	◎	◎	6／6
S14-02	▲	◎・▲	▲	○	◎	◎	6／6
S14-03	▲	◎・▲	◎	○	◎	◎	6／6
S14-04	▲	◎・▲	◎	○	◎	◎	6／6
S14-05	▲	◎・▲	◎	○	◎	◎	6／6
S14-06	▲	◎・▲	◎	—	◎	◎	5／6
S14-07	▲	◎	◎	○	◎	◎	6／6
S14-08	▲	◎・▲	—	○	—	◎	4／6
S14-09	▲	◎・▲	—	○	◎	◎	5／6
S14-10	▲	◎・▲	—	○	◎	◎	5／6
S14-11	▲	◎・▲	—	○	—	◎	4／6
S14-12	▲	◎・▲	—	○	◎	—	4／6
S15-01	▲	◎・▲	◎	○	—	◎	5／6
S15-02	▲	◎	◎	—	—	◎	4／6
S15-03	▲	◎・▲	◎	○	◎	◎	6／6
S15-04	▲	◎・▲	◎	○	—	◎	5／6
S15-05	▲	◎・▲	▲	○		◎	5／5
S15-06	▲	◎・▲	—	○		◎	4／5
S15-07	▲	◎・▲	▲	○		◎	5／5
S15-08	▲	◎・▲	—	○		◎	4／5
S15-09	▲	▲	—	○		◎	4／5
S15-10	▲	◎・▲	—	○		◎	4／5

S15-11	▲	▲	—	○		◎	4／5
S15-12	▲	▲	—	○		◎	4／5
S16-01	—	—	—	○		◎	2／5
S16-02	▲	▲	—	—		—	2／5
S16-03	▲	▲	—	—		◎	3／5
S16-04	▲	▲	—	—			2／4
S16-05	▲	▲	—	—			2／4
S16-06	▲	◎	—	—			2／4
S16-07	▲	◎	—	—			2／4
S16-08	▲	—	—	—			1／4
S16-09	▲	—	—	—			1／4
S16-10	▲	—	—	—			1／4
S16-11	—	—	—	—			0／4
S16-12	—	—	—	—			0／4
S17-01	—	—	◎	—			1／4
S17-02	◎	—	◎	—			2／4
S17-03	◎	◎	▲	—			3／4
S17-04	◎	◎	◎	—			3／4
S17-05	◎	—	◎	—			2／4
S17-06	◎	◎	◎	—			3／4
S17-07	◎	—	—	—			1／4
S17-08	◎	—	—	—			1／4
S17-09	◎	—	—	—			1／4
S17-10	◎	◎	—	—			2／4
S17-11	◎	—	▲	—			2／4
S17-12	◎	—	—	—			1／4
S18-01	—	—	—	—			0／4
S18-02	◎	—	—	—			1／4
S18-03	◎	◎	—	—			2／4
S18-04	◎・▲	◎	—	—			2／4
S18-05	▲	◎	—	—			2／4
S18-06	▲	—	—	—			1／4
S18-07	▲	—	—	—			1／4
S18-08	◎	◎	—	—			2／4
S18-09	◎	—	—	◎			2／4
S18-10	◎	—	—	—			1／4

S18-11	—	◎	—	—			1／4
S18-12	—	—	—				0／3
S19-01	—	—	—	—			0／4
S19-02	▲	▲	—	—			2／4
S19-03	—	▲	—	—			1／4
S19-04	◎・▲	▲	◎				3／3
S19-05	—	▲					1／2
S19-06	◎	—					1／2
S19-07	—	◎					1／2
S19-08	—						0／1
S19-09	—						0／1
S19-10	—						0／1
S19-11	—						0／1
S19-12	—						0／1
S20-01	—						0／1
S20-02	—						0／1
S20-03	—						0／1

＊網掛け部分は，当該雑誌の刊行なし。

この表によって，昭和10年代における文芸雑誌6誌の文芸時評（類）の掲載状況を通覧してみよう。

第1に指摘しておきたいのは，本稿の調査対象誌において昭和16年11月号から3ヶ月文芸時評（類）の掲載がなかったことを分水嶺とするかのように，昭和10年代後半，具体的にいうならば昭和17年以降，その衰退は明らかである。ここには，当然，雑誌の廃刊・休刊，紙不足による減ページも関わるのだが，創作や他の記事に先んじて文芸時評（類）が先細りしていったことは，確認できる。（他に掲載誌数が「0」だったのは，昭和18年1月号，同年11月号〜昭和19年1月号，同年3月号，5月号であった）。

逆に第2として，文芸時評（類）の隆盛ということになれば，本稿の調査対象誌6誌すべてが文芸時評（類）を掲出した昭和14年上半期をピークと考えることができる（昭和14年1月号〜7月号では，『若草』6月号をのぞき，すべてに文芸時評（類）が掲出されていた）。また，それに準ずるピークとしては，昭和10年代初頭があげられる。広めにとるならば，昭和10年〜昭和15年上半期あたりまでが，盛んに文芸時評（類）が掲載された時期だと考えることができる。

第3として，前稿における4大総合雑誌（『中央公論』・『改造』・『文藝春秋』・『日本評論』）誌上においては，昭和18年初頭に文芸時評の掲載がみられなくなっていたことと比すならば，文芸雑誌は昭和10年代後半においても粘り強く文芸時評（類）を掲出していたことになる。中でも昭和17年以降の『新潮』の持続的な掲載状況は注目に値する。

今後も，文学場の表面的／潜在的な動きにも配慮しながら，他の文芸誌や新聞学芸欄上の文芸時評（類）の調査・分析を継続していくことで，昭和10年代における文芸時評（類）の消長――その歴史的意味について，多角的な検討を進めていきたい。

注

（1）　拙論「昭和 10 年代における文芸時評（Ⅰ）――総合雑誌『中央公論』『改造』『文藝春秋』『日本評論』」（『人文学研究所報』2017. 3）。

（2）　拙著『昭和一〇年代の文学場を考える　新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会，2015）他参照。なお，当該時期の文芸時評について，拙論「昭和一〇年代における文芸時評・序説」（『ゲストハウス』2016. 9）参照。

（3）　小田切進「昭和十年代の文芸雑誌」（『国文学』1965. 6），43 頁。なお，文化統制が文芸雑誌に及ぼうとする局面に関して，拙論「『新風』をめぐる軌跡／言説」（『国語と国文学』2017. 5）参照。

（4）　この点に関しては，五味渕典嗣「紙の支配と紙による支配――《出版新体制》と権力の表象」（『Intelligence』2012. 3）他参照。

（5）　井口一男「文芸」（『国文学』1963. 9 臨時増刊号），188 頁。

（6）　野口冨士男「文藝」（日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典　第五巻』講談社，1977），371 頁。

（7）　1 ページあたり，3 段分の上 2 段分を当該記事掲載スペースとした誌面レイアウト（通常の 3 段の部分を含む場合もある）。以下同。

（8）　奥付の総頁表記は「208」となっているが，現物に即して 240 頁とした。

（9）　目次のタイトルは「漠然たる無気力（文芸時評）」となっている。

（10）　小田切進「文学界」（『日本近代文学大事典　第五巻』前掲），362～363 頁。

（11）　誌面レイアウトとしては，3 段分の上 2 段分が段組なしの当該記事掲載スペースとなっている。以下同。

（12）　柳生四郎「若草」（長谷川泉編『近代文学雑誌事典』至文堂，1966），136 頁。なお，小平麻衣子「林芙美子と文芸誌『若草』――忘却された文学愛好者たち――」（『国語と国文学』2017. 5）も併せて参照。

（13）　昭和 13 年 3 月号の目次には，北岡史郎「文壇時評」（122 頁）と記載はあるが，本文には当該記事なし。

（14）　この後，「文壇時評」と同様のレイアウトで，北岡史郎「文化時評」（S16. 2～6）が掲載されている。

（15）　拙論「昭和一〇年代における『若草』「文壇時評」――“詩”と“ヒューマニズム”」（『文芸雑誌『若草』（仮）』近刊予定）参照。

（16）　保昌正夫「作品」（『日本近代文学大事典　第五巻』前掲），123 頁。

（17）　拙論「昭和一〇年前後の新人（言説）――雑誌『作品』と石川淳」（拙著『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲）参照。

（18）　1 ページあたり，3 段分の上 1 段分を当該記事掲載スペースとした誌面レイアウト。

（19）　小田切秀雄編著『現代日本文芸総覧　補巻』（明治文献，1973），695 頁。なお，紅野敏郎「昭和十年代文学に関する一考察――『文学者』をめぐって――」（『文学』1972. 6）も併せて参照。

Survey results on reviews in monthly literary magazines in the second decade of the Showa era（Ⅱ）

――Literary magazine（“Shinchou”,“Bungei”,“Bungakukai”, “Wakakusa” ,“Sakuhin” and“Bungakusha”）

MATSUMOTO, Katsuya

Abstract

In this paper, I conducted a survey on reviews in monthly literary magazines in the second decade of the Showa era. The survey focused on the six types of literary magazine（“Shinchou”, “Bungei”, “Bungakukai”, “Wakakusa”, “Sakuhin” and“Bungakusha”）. After introducing the research situation on the reviews, I obtained data on the posting situation of that 10 years. As a result, I found that review postings were less than expected. The turning point from this survey has revealed that it's Showa 17. On the contrary, reviews in monthly literary magazines was actively published in the first half of Showa 14.